公印省略

1 農 林 試 第 1963 号
令 和 2 年 2 月 12 日

各関係機関団体の長
各 病 害 虫 防 除 員
} 殿

福岡県農林業総合試験場長
（福岡県病害虫防除所）

令和元年度病害虫発生予察技術情報第８号について

このことについて、病害虫発生予察技術情報第８号（キャベツ菌核病の防除対策）を発表したので送付します。

技術情報第８号

１　対象作物名：キャベツ

２　病害虫名：キャベツ菌核病（*Sclerotinia sclerotiorum*）

３　これまでの発生状況

本年は、冬季の気温が高く降水量も多く推移したことで、２月２半旬調査では発病株率が4.7%（前年：6.2%、平年：1.4%）、発病株率66.7%（前年：33.3%、平年：36.3%）と平年より高く、多発した前年並の発生となった（図１、２）。

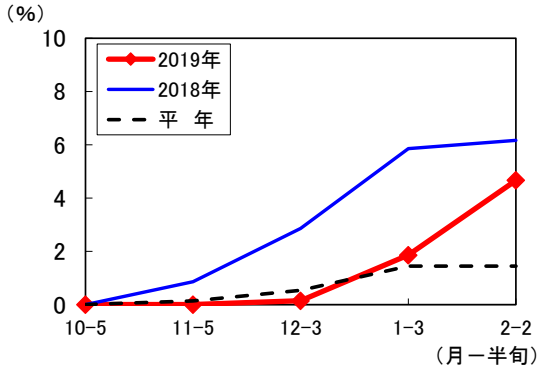

図１　発病株率の推移

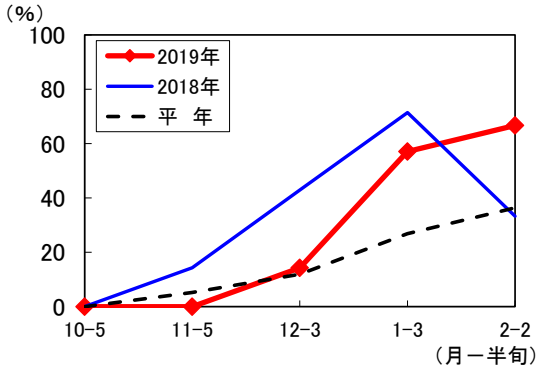

図２　発生ほ場率の推移

４　防除上注意すべき事項

本年は、気象要因に加え、前年に発生した菌核が土壌中に多数残っていたことで多発したと考えられる。

向こう１か月の天候は、気温が高く、降水量が平年並か多い多発条件の見込みであるため（令和２年２月６日発表、福岡管区気象台）、今後も発病が続き、土壌中で越年・越夏する菌核が多くなると予想される。

次作の発生を抑制するために、次の対策を徹底する。

（１）　収穫後の対策

① 収穫終了後は、子のう盤形成適期（４月下旬頃）前に反転耕を行い、菌核を５～10cmよりも深く埋没させ、子のう盤の形成を抑える。

② 多発ほ場では可能なら水田転換を行うか、夏季に湛水する。

③ 本病が発病する作物（アブラナ科、キク科、ウリ科、バラ科など）との輪作を避ける。

（２）　生育中の対策

① 発病株は、ほ場に放置せず見つけ次第早めに掘り取り処分する。

② 多発が予想される場合には、予防的に薬剤散布を行う。散布の際は、初発部位である株元に十分かかるように行う。

写真１　株元の初期病徴

写真２　結球部に形成されたネズミ糞状の菌核

参考：キャベツ菌核病の生態

① 本病原菌は、被害部に生じた菌核が落下し、土壌中で越年・越夏する。菌核は、秋や春に発芽して、キノコ状の子のう盤を形成する。子のう盤に形成された多数の子のう胞子が飛散して、一次感染が起こる。

② 気温15～20℃前後で、多湿の場合に発生が多い。このため、秋の９～11月と春の３～４月に多湿条件が続くと発生が多いが、暖冬の年には１～２月にも多発する。

③ 菌核は不適な環境に対する抵抗力が非常に強く、畑土壌中では２～３年生存するが、湛水状態では死滅する。

④ 本病を保菌していると輸送中においても発病するため注意を要する。

⑤ 本病原菌は、キュウリやレタス等、多くの作物を侵す多犯性である。

○病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「福岡県病害虫防除所ホームページ」　http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/

福岡県病害虫防除所

最新の病害虫発生状況